

## 三十三観音像の諸問題

大阪芸術大学 美術学科 教授 五十嵐公一

室町時代の東福寺の画僧・明兆が、1412年に「三十三観音図」(東福寺)という全33幅から成る作品を描いている。

この33幅の画面下部は、明時代の木版折本である洪武28年(1395)版「出相観音経」の図をもとに描かれている。この出相観音経というのは、絵入りの観音経のことをいう。明兆の「三十三観音図」の画面下部は、洪武28年版「出相観音経」の多くの図の中から33図を選んで描かれているのである。

また、明兆の「三十三観音図」の画面上部には大きな円の中に白衣観音が描かれている。そして33幅を並べた時、右からも左からも17番目にあたる幅には結跏趺坐した正面向きの白衣観音が描かれている。更に、この17番目の白衣観音に対し、それ以外の32幅全ての白衣観音が顔や体を向けた姿で描かれている。つまり、17番目の正面向きの白衣観音に、中尊の役割を担わせているのである。以上のことから分かるように、明兆が描いた「三十三観音図」は33幅で見事な規則性を示す作品なのである(五十嵐公一「東福寺蔵三十三観音像」『美術史論叢』11、1995年)。

明兆が描いたこの「三十三観音図」は、後世に大きな影響を与えたようだ。というのは、やはり33幅から成り、その画面上部と画面下部も明兆の「三十三観音図」と同じ画面構成をもつ作品が、現在までに6点確認できているからである。

それは1443年に描かれた、江州甲賀郡那坂の勝蓮寺旧蔵の「三十三観音身像」(藤田美術館)。1647年以前に描かれた、狩野探幽の「守信」(朱文瓢印)が捺されている「三十三観音図」(香雪美術館)。1677年に黄檗宗の画僧・卓峰道秀が描き、伏見の仏国寺に伝わった「観音変相図」(東京国立博物館)。相国寺の法住院第九世である文室宗言が1703年頃に描いた「観音三十三変相図」(相国寺)。兵庫県西宮の絵師・勝部如春齋が1763年頃に描いた「三十三観音図」(茂松寺)。寛政度禁裏御所障壁画制作にも参加した原在中が、1793年に描いた「観音三十三身」(酬恩寺)。この6点である。

このうち藤田美術館の作品は2019年、香雪美術館の作品は2021年、相国寺の作品は2020年に開催された展覧会で初めて知られるようになったものである。

そこで、このような近年の状況に触発され、明兆の「三

十三観音図」とそれに基づいて描かれた作品群について改めて考えたいと思った。これが本研究の出発点だった。

ただ、明兆の「三十三観音図」とそれに基づいて描かれた作品群は、いずれも33幅から成る。そのため、比較が容易ではない。そこで、まずは大きな視点を得るため、これらの作品の33幅を表にして整理してみた。すると面白いことが複数見えてきた。

例えば、東京国立博物館と相国寺の作品だけには、他の作品には見られない白衣観音が描かれている。このことから、この二つの作品は特に近い関係にあると考えられる。また、酬恩寺の33図の中には、明兆の「三十三観音図」の画面に込められていた図像の意味が失われているものが複数確認できた。その逆に、茂松寺の作品は明兆の「三十三観音図」と図像が最も近似し、忠実に従っていることが明らかとなった。これらのことから分かるように、明兆の「三十三観音図」と6点の作品との関係は決して一様ではない。

では、このことは何を意味するのだろうか。これを理解するには、三十三観音図の画面だけではなく、その信仰の歴史にも注目する必要がある。明兆の「三十三観音図」は、1466年に東福寺方丈で行われた観音懺法という儀式で使われたことが『蔭涼軒日録』の記録から分かる。この観音懺法というのは、観音菩薩を本尊とし、その前で懺悔を行う修法である。そして、この観音懺法の歴史を調べると、その展開において重要な役割を果たした人物が二人いることに気づく。室町幕府4代将軍・足利義持と、江戸時代初期の後水尾院である。そして先の6点の作品は、この足利義持や後水尾院と何らかの関係を指摘できる。

このように本研究は比較的順調に進んだ。そこで、研究の初期段階で分かったことをまずは「三十三観音図の変異」という論文にして『藝術文化研究(大阪芸術大学大学院芸術研究科)』28号に投稿した(2024年2月発行)。これは投稿期限の締め切りまでに確認できたことをまとめたものである。それ以降に確認できたことに関しては、今後別の形で発表してゆく予定である。

また、西宮市大谷記念美術館で「画人たちの仏教絵画—如春齋、再び!—」という展覧会が開催され(会期:2023年10月21日~11月26日)、その展覧会図録に「勝部如春齋の三十三観音図」という論文を発表する機会を得た。これも本研究の成果の一部である。